サッカーにおけるモラルジレンマを活用した
フェアプレー教育に関する研究

平岩　玄（静岡大学）

１．目的

本研究では、サッカーの競技中に起こるモラルジレンマの事例を取り扱い、フェアプレー教育に向けたモラルジレンマの活用の有効性やその方法について明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

サッカーを専門種目とする大学生にモラルジレンマ物語を用いたアンケート調査を行い、そこから得られた回答をテキストマイニングによって分析するとともに、その中から無作為に抽出した大学生に対しアンケート結果を提示し、その前後における考え方の変化の有無についてインタビュー調査を行った。そこからフェアプレー教育に向けたモラルジレンマを活用することの有効性や方法について検討した。

１）対象者：Ｓ大学サッカー部 58 名

２）調査時期：アンケート調査を令和２年 11 月 3 日に行い、インタビュー調査を令和 2 年 11 月 20 日から 11 月 30 日に行なった。

３）分析方法：KHcorder によるテキストマイニングを行なった。

３．結果と考察

勝ち点 3 のためにファールすることが正しいか正しくないかというモラルジレンマ物語に対し、正しくないと回答した人が７％、正しいと回答した人が 73%、どちらとも言えないと回答した人が 20%を占めていた。自由記述からは、強い自分でなくてはならないことを自覚しつつも弱い自分になることを選択したり、強い自分でいることと弱い自分に流されてしまうことで葛藤したり、弱い自分を理解した上で強い自分であり続けようと考えていたり、と多くの表れを見ることができた。インタビュー調査では、アンケート調査の結果を提示し、他の人の考えや価値観を聞くことによって自分の考えや価値観が変化するかどうかを調査したが、対象となった８人全員が自身の考えに変化は現れなかった。

以上のことから、フェアプレー教育の一環としてモラルジレンマ物語という教材に触れることで自分の悪の部分が表出し、それを他人の価値観と比較することで自分の道徳的価値観が相対化されるのではないかと考えられる。本研究を通して、フェアプレー教育に向けてモラルジレンマ物語という教材を用いることの可能性を見ることができた。

４．結論

本研究では、フェアプレー教育に向けてモラルジレンマを活用することの有効性やその方法について明らかにすることを目的として研究を行なってきた。大学生を対象とする調査であり、大きく価値観が変化することはなかったが、モラルジレンマを教材として用いたならではの感想が得られ、フェアプレー教育に向けてモラルジレンマを教材として活用することの有効性は明らかになったと言える。また、方法についても道徳教育で実践されるような、考え議論する形式が適切であると言える。

５．主な参考文献

友添秀則（2017）：よくわかるスポーツ倫理学, ミネルヴァ書房

シェリル・ベルクマン・ドゥルー（2012）：スポーツ哲学の入門, ナカニシヤ出版

文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chyukyo0/toushin/1344356.htm

（2020 年 12 月 20 日確認）